木下杢太郎

新田義之

小沢書店

木下杢太郎
昭和五十七年七月十五日印刷
昭和五十七年七月二十日発行
定価二〇〇〇円
著者　新田義之
発行者　長谷川郁夫
発行所　小沢書店
東京都千代田区富士見二―五―十二
電話（東京）二六三―九二一八（代）
印刷所　凸版印刷
製本所　大口製本
製函所　日東工業

©Y. Nitta, 1982　Printed in Japan

木下杢太郎　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

I 西欧とのかかわり 7
II 古典に通じる道 31
III 国語国字問題をめぐって 49
IV 近代的自我意識の形成とその宿命 90
V 受容と創造——ホーフマンスタールと若き李太郎
VI 『日記』の性格 166
VII 深まりゆく詩境——『残響』 181
VIII 晩年の生——『百花譜』 194
あとがき 209

装画　木下李太郎『百虫譜』より

木下杢太郎

I　西欧とのかかわり

木下杢太郎の名は、時の流れとともに一般の読者層からは忘れられ、華々しく再評価されるきざしも見えない。わずかに若き日の抒情詩を集めた『食後の唄』初版本と、鷗外と漱石の序文を持つ彼の最初の小説集『唐草表紙』とが、またさらにつけ加えるならば、第一書房より出版された豪華な『木下杢太郎詩集』とが、今日でもなおブックマニアの蒐集の対象となっているにすぎない。だが、このような一般の評価とは別に、本当に文芸を愛するものや、日本文化のあり方を考えようとする人たちにとっては、杢太郎の名は今もって新鮮な魅力に富んだものである。

私たち自身が日本文化に関して何か特定の問題を意識し、それを深く考究してゆこうとするとき、同じような問題に自分よりも先に取り組んだ人として幾人もの先達の姿が浮かび上がってくる。森鷗外を、夏目漱石を、柳田国男を、折口信夫を、西田幾多郎を、そしてその他の多くの先達を私たちは持っていて、私たち自身の悩みとよく似た悩みをこの人たちの生涯の中に

みつけ、その解決に向かって払われた努力を見て感動し、自分自身の営みのあらゆる意味での糧としている。木下杢太郎は、たんに若き日に特異な才能を示した詩人として、また戯曲作家、小説家としてのみではなく、生涯をかけて日本文化のあり方を考え続けた思想家として、そして生涯を通して多方面の創造活動に自分のすべての時間と精力を投入し続けた実行の人として、私たちの先達のうちでも最も偉大な存在の一人である。

杢太郎は実に多才な人であった。医者としては東京大学医学部皮膚科の主任にまで至り、多くの独創的な研究を残したし、文学者としては、若き日の詩業は一応別にしても、小説に随筆に紀行に、珠玉のごとき作品が多い。またわが国のキリシタン研究史においては、まさにこの分野の開拓者の一人であった。洋画も南画もよく描き、美術評論家としても一流であった。その他余技に類するところを記せばきりがない。ただ、この多才な杢太郎のあらゆる部分に共通に見られることは、伝統的日本文化と西欧文化との出会いから生ずる問題を、いかに解決してゆくかという意識の、その激しさと深さとである。西欧文化との対決によってわが国の近代的意識は磨き上げられてきた。その意味で杢太郎は典型的な近代日本の文化人の道を歩んだともいえるのであるが、その歩み方に余人には見られぬ特異な態度があり、個性がある。私たち日本人にとっての宿命である西欧文化との出会いを杢太郎がいかに経験し、そのさいにいかに考えて身を処していったかを見れば、多方面にわたる彼の活躍をもっとも本質的な一点においてとらえ、理解することが可能になり、また、私たち日本人に共通の宿命に私たち自身が思いを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こらすさいに、自らをかえりみるための尺度となる先人の足跡を、具体的につかまえやすい形で整理しておくことにもなるであろう。

杢太郎は明治十八年八月一日に、伊豆の伊東で生まれた。本名は太田正雄である。七人きょうだいの末子で、長姉とは二十一歳、次姉とは十七歳、三姉とは十五歳も違っていた。生家は旧い町家で、濃厚な江戸文化の名残りの中に生きていたが、ここに新しい文明開化の空気をもたらしたのが、この姉たちであった。杢太郎と西欧文明との出会いは、この時に始まるといってよい。

「予と十幾つか歳の違ふ姉たちは巌本善治の学校に学び植村正久の弟子であつた。……東京或は横浜から毎夏帰省する姉たちは薄暮の海岸で英語の歌を歌つて聴かせてくれた。予のエキゾチスムはこの時に育まれた。幾分漢学の分子を加味した耶蘇教的、洋学的世界が予の五六歳の頃日本の或処に浮動して居たのである。そして片田舎の漁村に於てなほ且何か華やかで摑み難きものの存在を感知した。即ちそれは欧羅巴文明に対する予感であつた」(『我々の通つて来た時代』)

杢太郎自身によって後年このように回顧されているように、彼と西欧文化との関係は、ほとんど生まれついた時からの宿命のようなものであった。そのうえ、幼児を過した生家が江戸の文化圏内にある田舎の旧家であったため、江戸末期の爛熟した町人文化への愛着も心の底に深

く強く染みついていた。この二つの要素の単純な合体から、杢太郎の初期の文学活動が出発することを、私たちは後に見ることになるだろう。

小学校を生まれた土地ですませた後、明治三十一年四月に東京に出て、独逸協会中学に入学した。この学校はドイツ語を教える数少ない中学校の一つで、長い伝統を持つ名門である。中学時代からドイツ語を学ぶということは、当時の常識として、将来医学に進むことを前提としている。すなわち杢太郎は、最初から医学に進む予定で勉強を始めたわけである。このコースを選ぶにあたっては、杢太郎自身の希望よりはむしろ近親の意志が強くはたらいたという事情があった。それゆえ、高等学校に進む時にも大学医学部に入る時も、進路を変えようと望んだことのあったのも事実である。だがそのような職業選択上の悩みの問題は別にして、彼が最初に身につけた外国語がドイツ語であったのは、彼の西欧文化への接近を考えるときにまず注目しなければならないところである。

杢太郎とドイツ語との関係はその後ますます深くなってゆく一方であった。明治三十六年七月に第一高等学校第三部、すなわち医学部進学コースに入り、ここでは明けても暮れてもドイツ語ばかりであったと思われる。わずかながら残っている当時の手紙には、必ずと言ってよいほどドイツ語の単語が混っているし、中にはすっかりドイツ文で書かれたものさえある。まだあまり上手とは言えないが、文法的な誤りは少なく、とにかく言いたいことが曲りなりにも言いえているのは妙である。学校で習ったもののうち、彼に特に大きな印象を与えたのは、ゲー

テの『イタリヤ紀行』であった。後世までいろいろの逸話の伝えられている有名教授、岩元禎が先生であった。杢太郎は岩元先生を尊敬していたらしく、医学部に進学するさいに、個人的に悩みを打ちあけて助言を乞うている。

ドイツ語がだんだん上達してくると、ドイツ書を読むことも多くなる。ゲーテに限らず、その他の作家のものも杢太郎は読みあさったに違いない。その中にはドイツ語に訳された外国文学、とくにツルゲニエフなどのロシヤ文学も含まれていたが、何といってもドイツとオーストリヤの文学が主であったのは当然であろう。日本語で読んだものとして上田敏の『海潮音』、森鷗外の翻訳小説などがあり、それらを通してフランスやイギリスやその他の海外文学に接したが、それは当時の文学青年に共通の経験であって、とくに杢太郎に限ったことではない。ただそのような一般的雰囲気とは別にして考えなければならないのは、三宅克己について洋画を習っていたことで、それが下地となって後に「方寸」の人たちとの交際がひらけていったことは見落としてはならない。絵画におけるフランス印象派への傾倒は大学時代の杢太郎に著しいできごとだが、高校時代にこの方面の準備もされていたことは忘れてはならないと思う。この、絵を通してのフランス文化への接近とドイツ語の関係については、後ほど一言するところがあろう。

杢太郎が東京帝国大学医学部に進んだのは明治三十九年七月である。これから大正五年九月に満洲に赴任するまでのほぼ十年間が彼の文学的生涯の第一期で、文壇的にいちばん華やかな

時となる。新詩社の同人として『明星』に拠り、さらに『スバル』の中心人物の一人となったが、『屋上庭園』を創刊したほか、『太陽』『中央公論』『三田文学』等々の雑誌や『二六新報』『読売新聞』等々の新聞に毎月幾篇もの作品を発表する健筆多作ぶりであった。この時期の彼の作風は現在「耽美派」とよばれているものに属していて、北原白秋や吉井勇などと同じ傾向とみなされている。「南蛮文学」と称する一境地を開拓し、東京下町の情調をパリの雰囲気にみたて、「パンの会」を催して芸術のための芸術に酔い痴れたのは野田宇太郎著『日本耽美派の誕生』や『きしのあかしや』などに詳しく説かれているとおりであろう。

この時代の若い芸術家たちがひたっていた感動と熱狂との底には、高踏派と象徴主義と印象派への心酔があり、これを模倣しようとする意識があった。すなわちフランス的な芸術上の趣味が流行の表面を支配し、日本の伝統的情調を、その流行にかぶれた目で眺め、解釈し、歌おうとし、描こうとしたのが、彼らに共通の傾向である。

しかしそうはいっても、彼らは彼らの表現のもとになる思想や感覚を、必ずしもすべてフランスの文化から学んだわけではない。ある人は英語を通し、ある人はドイツ語を通して学んだものを、時代の風潮に応ずるように加工し、また、それぞれの読み得る外国語書籍の中で、この風潮に対応すべく適当なものを捜し選んでいたのである。この意味で彼らの芸術運動は未だ「文明開化」的段階をぬけ切ってはいなかった。西欧の流行的思潮に鋭敏に対応しながらも、その入ってくる経路は問わず、西欧語が何一つ読めなくても上田敏や森鷗外の翻訳でけっこう

間に合ったくらいで、サンボリスムといいアンプレショニスムといっても結局は西欧文化そのものとさしたる区別もなかったのである。それゆえゲーテとシュトルムとホフマンスタールを読みながら、「印象派画家の風になら」ってチョコレートの詩を作った杢太郎の中に矛盾も分裂も見出す必要はない。

大学時代の杢太郎にとっての西欧は、翻訳されたものや友人との交際から入ってくるもののほかは、もっぱらドイツ書を通しての体験であった。明治四十三年すなわち大学二年の頃からかなり熱心にフランス語の勉強はしたらしいが、それでも主な読書はドイツ語に限られていた。フランス印象派の知識さえほとんどすべてリヒャルト・ムーター(Richard Muther)の書によったもので、ムーターの説くところが純然たるドイツ人のフランス絵画観であることは言をまたない。文学関係ではこの傾向がさらに強く、初期の小詩にはシュトルムの、戯曲にはホフマンスタールの影響があったことは、彼自身が後に『南蛮文学雑話』『フウゴオ・フオン・ホフマンスタアル父子の死』『明治末年の南蛮文学』等の中に述べているとおりである。有名な『南蛮寺門前』もリヒャルト・シュトラウスの『ツアラトストラ』に暗示を得たのだそうである。シュトルムやホフマンスタールについては翻訳も試みているが、とくに後者の著作はほとんど全部読んでいたらしく、大変な傾倒ぶりであった。ドイツ青年フリッツ・ルンプとの交友、美術史家クルト・グラーザーとの出会いなど、直接に知り合った外国人もほとんどドイツ系の人たちに限られている。すなわち杢太郎の大学時代の西欧体験は、ことごとくドイツ語を媒介と

して行なわれたと言っても過言ではない。大学で修めた専門の学科である医学の教育がまったくドイツ式であったことは、改めて言うまでもない。

明治四十四年十二月に医学部を卒業した杢太郎は、専攻部門として皮膚科を選び、土肥教授の教室に入ることとなった。土肥慶蔵博士はわが国の皮膚科学研究の祖とでもいうべき人で、当時すでに世界的に著名な学者であったのみならず、鶚軒と号する漢詩人でもあり、文学や美術についての見識もあわせ持っていた。厳格なことでも有名で、弟子として教室に採用するにも、なかなかやかましかったらしい。杢太郎と同期に卒業したもののうちで皮膚科を志望するものは数名あったが、すぐに教室に採用して貰えたのは成績の優れていた二名だけで、あとはもっとどこかで勉強してから来いということであった。杢太郎がはねられた一人であったところをみると、必ずしも学業成績が優秀ではなかったのだろう。そこで緒方正規教授の衛生学教室に入り、細菌学の講習を受け、実験計測等に半年をついやして、四十五年七月から皮膚科教室に移ったのである。

土肥教室で彼はその後の四年間をすごすことになるが、卒業後のこの四年半の医局時代は、杢太郎と西欧とのかかわりを考えるうえに、一つの大きな意味をもっている。すなわち、フランス医学の認識がこの時期に深まったのではないかと推測されるからである。衛生学教室で細菌学の講習を受けた時、彼は細菌学に強くひきつけられた。皮膚科にゆく決心のつく前にこの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com